



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	今日的課題を含む授業における授業形態による効果の違いと意識変容についての考察：学校図書館活動を取り入れた防災関連授業の実践をふまえて( fulltext )
Author(s)	杉森, 伸吉; 鈴木, みゆき; 柴原, 智美; 大塚, 啓太; 齋藤, 大地; 朝蔭, 恵美子; 村上, 恭子; 岡田, 和美; 青山, ひなよ
Citation	東京学芸大学附属学校研究紀要, 47: 47-53
Issue Date	2020-07
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/159373">http://hdl.handle.net/2309/159373</a>
Publisher	東京学芸大学附属学校研究会
Rights	

# 今日的課題を含む授業における授業形態による効果の違いと意識変容についての考察

— 学校図書館活動を取り入れた防災関連授業の実践をふまえて —

東京学芸大学（附属大泉小学校長・教授）	杉 森 伸 吉
国立青少年教育振興機構（理事長）	鈴 木 みゆき
附属高等学校	栞 原 智 美
東京大学（研究員）	大 塚 啓 太
附属特別支援学校	齋 藤 大 地
附属世田谷小学校	朝 蔭 恵美子
附属世田谷中学校（司書）	村 上 恭 子
附属高等学校（司書）	岡 田 和 美
世田谷こころ保育園（園長）	青 山 ひなよ

## 目 次

1. はじめに	
1. 1. 研究の目的（意義と目的）	48
1. 2. 研究の内容と計画	48
1. 3. 研究計画の履行状況	49
2. 授業実践	49
3. 生徒の持つワールドカフェ授業実践のイメージとその示唆	51
4. 今後の課題と予定	53
5. 学校図書館との連携	53
引用文献	53

# 今日的課題を含む授業における授業形態による効果の違いと意識変容についての考察

— 学校図書館活動を取り入れた防災関連授業の実践をふまえて —

東京学芸大学（附属大泉小学校長・教授）	杉 森 伸 吉
国立青少年教育振興機構（理事長）	鈴 木 みゆき
附属高等学校	栗 原 智 美
東京大学（研究員）	大 塚 啓 太
附属特別支援学校	齋 藤 大 地
附属世田谷小学校	朝 蔭 恵美子
附属世田谷中学校（司書）	村 上 恭 子
附属高等学校（司書）	岡 田 和 美
世田谷こころ保育園（園長）	青 山 ひなよ

## 1. はじめに

### 1. 1. 研究の目的（意義と目的）

「現在の教育に関する主な課題」の教育目標を実現する為の要素として文部科学省学習指導要領があげるものに「青少年の自然体験」「読書活動」がある。これらが課題として挙げられる背景として、変化する世の中を生き抜くための意欲が必要だとされていることがある。しかし、日本の青少年の意欲の源とも言える自己肯定感は低いといわれている。子どもの頃の様々な体験が豊富な人ほど、大人になってからの意欲や生きがい、モラルや人間関係能力などの資質・能力が高い傾向にあるという国立青少年教育振興機構による平成27年8月「高校生の生活と意識に関する調査報告書」の調査結果がある。体験の豊富さが子どもの資質を高めることと「青少年の自然体験活動」が課題と指摘されていることを踏まえると、自然体験を学校教育実践にて取り入れることの効果は十分期待できると考えられる。自然の中で活動し、友達と外で遊ぶ機会も減少している。協働体験が少なく、コミュニケーションをとる機会が減ってきている現状の中で育った園児・児童・生徒が、授業活動の中に自然に関連する事項や身の回りのことなどを取り上げた時に、どのような意識を持ち、自分自身に引き寄せながら考えていくことが出来るのかを考察していきたい。

自分を振り返り、学習を深めながら今日的課題に関心を寄せられる可能性のある題材として災害、防災について考える授業形態としてワールドカフェ方式を取り入れた。SDGsを意識した持続可能な社会の担い手としての児童・生徒を育てる、自らが社会を担っていくという意識、自己肯定感の高い児童・生徒を育てる授業を意識して設定した。また、生涯にわたり図書館を日常的に活用できる能力をつけることも公教育として大切であり、今回の学習に意識的に取り入れた点である。

### 1. 2. 研究の内容と計画

<内容>

1年次は、通常の一斉授業方式とワールドカフェ方式の授業への生徒の取り組み方と意識の違いおよび授業効果について活動観察とアンケート分析により明らかにすることに取り組んだ。授業形態としてワールドカフェ方式を取り入れた授業にした場合、児童・生徒がどのような意識で学んでいくのかを初年度は中心に実施した。ワールドカフェ方式などの授業形態の効果を広く紹介する機会として、2018年度は東京学芸大学図書館運営委員

会の文部科学省助成授業報告会（2019年12月22日東京学芸大学）において、1年次の実践を報告した。「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」（以下 Web サイト）とリンクさせながら、授業実施をしている。また、中山間地域についての1年次の実践は日本環境教育学会2019年5月発行のテキストにワールドカフェ方式として掲載されている。

2年次は、情報をどのように与えていくのが効果的な授業になるのか、学校図書館からの本・資料提供を活用し、学校図書館での実施を授業に取り入れ、今日的課題でもある「読書活動」をより積極的に取り入れた授業を実施し、効果を活動評価およびアンケートの分析により明らかにした。「21世紀に必要とされる次世代型能力の学び」への関連性のある要素は何なのかを授業の中で探った。

今回実施したワールドカフェ方式授業は、カフェのようになりラックスできる空間の中で少人数が意見を交わすものである。ここから生じる3つの特徴は、①自分の意見を言いやすい。具体的には皆の前で発言するより緊張しにくく、話しやすい環境で参加者が口を開きやすいと考えられる。また、距離が近く、互いの話を聞き合いやすい。②相手との繋がりを意識できる。否定される事はないので、尊重され、対話が活発になる効果が期待される。③参加者全員の意見や知識が共有できる。以上のことが、今回の授業実践を振り返る意味でのポイントとなる。

#### <方法・年次計画>

「1年次」は東京学芸大学附属世田谷中学校と東京学芸大学附属特別支援学校において、ワールドカフェ方式で授業を行った。アンケートと活動観察を実施した。小学校と高校のアンケート作成と授業構想準備を行った。2年次は、情報をどのように与えていくのが効果的な授業になるかを、高校を中心に実践し、学校図書館からの本・資料提供を活用したワールドカフェ方式の授業を実施した。その後、高校生が自分たちで授業案を考える流れとした。具体的には、今日的課題でもある「深く考える、自分に戻して考える」ことを積極的に取り入れた授業を実施し、アンケートを実施。「21世紀に必要とされる次世代型能力の学び」への関連性のある要素は何なのかを授業の中で探った。関連授業について10月に日本教育大学協会研究大会（岡山大学）で桑原・前田・岡田（村上）口頭発表。8月、日本環境教育学会全国大会（山梨県）で関連研究を桑原が口頭発表。

「2年次」は1年次の結果を踏まえて高校で実施。アンケートと活動観察を実施。

### 1. 3. 研究計画の履行状況

申請は2018年度が初年度であるが、2017年12月に附属世田谷中学校において4時間扱いの1年選択授業で今回の研究申請と類似する形態の授業実践を試みている（2017.12.12.東京学芸大学附属世田谷中学校家庭科選択授業 学校図書館と家庭科室において実施。「ワールドカフェで考えよう！」）。資料の質や話し合いの深め方を変えることで、小学生の「生活科」や中学生での「総合的な学習の時間」へのアレンジの可能も見えてきた。自ら情報を選択し、自分自身の学習を深めていく「自分との対話」を授業の中でも深めていくことのできる題材を考えている。

### 2. 授業実践

<高等学校実践「災害を意識した指導案作りの授業 ワールドカフェで考えよう！」授業>

<要旨>

誰かに伝える、ことを目標としてまとめていく方法を考え、高校生自らが学習指導案を考える授業を試みた。授業者という立場を意識することで、人にわかりやすく伝えるために、正しく深い知識が必要であることを実感し、自分が伝えたいことが伝わるようにするためには、どのような方法があり、どこを強調すれば伝わるのか、などの発信を意識した授業展開とした。予測できない未来に「主体的に向き合って関わり合い、その過程を通して、一人一人が自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生を自ら創り出していくこと」（中央教育審議会、2017）が

求められている。また、「持続可能性のとりで」を心の中に築く『持続可能な開発のための教育』があらゆる学校段階、そして生涯教育の中で求められている。」(2019, 荻原)とある。そこで、生徒自身が課題を発見し、科学的に考え、協働しながら発信しようと試みる機会を持つ授業にしたい。班で話し合うアクティブな方法を取り入れ、また、否定をされないことが特徴の一つでもあるワールドカフェ方式で自由な気持ちで多くのアイデアが出せる環境を準備し、学校図書館を活用することで、多くの本や知識に触れ、仲間の意見を聞き、生徒を揺り動かす(ナッジ授業)の展開にした。

対象を①幼児②小学生③中学生④高校生⑤一般、という5つのグループに分け、発達段階を意識しながら、その対象に向けて「災害を意識した授業」を生徒自らが考え、実際の授業や活動に繋げた。

<キーワード>高校生, 災害, 指導案

### (1) 単元計画

第1次 レポート作品を観点を決めて評価の観点を意識する練習をする。内容・着眼点と発信者としての表現を評価する。ワールドカフェ方式で、否定をしない情報共有を行い、指導案を作成する。(3時間)

第2次 指導案を模擬授業を通して、クラスに発信する。(1時間) 本時

第3次 授業実施と振り返りで、内容・着眼点および発信について考え、深める。(2時間)

対象 2年A組(男子20名, 女子22名 計42名) 単元名 「災害を意識した授業を考える」

(2) 単元の目標 発達段階により、どのような内容を取り上げることが災害や防災の授業学習に適するのかを考えることができる。また、指導案を考えようと努力することができる。授業の評価の観点について考えながら災害を意識した授業を生徒が考えることができる。

### (3) 単元設定の理由

・生徒たちの実態および本単元に至るまでの学習

2年生から家庭基礎2単位を履修し、1学期調理実習3回、栄養理論、2学期教育実習生が担当し高齢者、車椅子実習、終了後調理実習、現在エプロンを製作中である。夏休みの宿題の災害、防災関連事項のA4版1枚のまとめを作成し、今回の授業の導入としている。調理実習、エプロン製作ともに意欲的に取り組んでいるが、日常的に家庭で実習関連事項に触れる機会は少ないように思われる。特に知識として学んだ既習理論が実習時に繋がらない場面が認められている。こうした結びつけがこれからの課題として指摘できるような生徒たちである。

・教材の特性と授業者の手立て

各自で災害についてまとめたお互いのレポート作品を、クラスを超えて見合った。この際に生徒たちは、観点を各自で決めて、それに沿った評価を行った。加えて、発信者としての表現の仕方についても評価を行った。その後、学校図書館の災害・防災関連の本を読み、授業対象年齢を決めた上で災害・防災関連の本についてまとめ、ワールドカフェ方式で意見を出し合い、情報を共有した。

### (4)

#### ①本時のねらい

災害レポート作品の評価活動、発信者の表現の仕方の評価活動の練習後のワールドカフェ方式での意見を出し合い、情報の共有を経ての指導案作成とその模擬発表での根拠を持った内容の取り上げと伝え方について考える。

#### ②本時の授業展開

時間	学習の流れと生徒の活動	教員の指導と手立て
10分	今までの学習の振り返り。指導案で取り上げた内容とその理由，評価の観点をまとめる。	ppを用いて，学習の流れの振り返りを促す。資料の活用を伝える。
30分	指導案を模擬授業を通して，クラスに発信する。	模擬授業の仕方の説明を行う。自分の考えを伝えることを意識させる。
10分	指導案の内容・着眼点および発信について考え始める。対象者への授業実施について知る。	授業実施等について説明する。保育園，小学校，野外実習について伝える。

効果測定については，2017年9月環境教育学会発表（栗原・大塚）の「学校教育における体験的総合学習の考察」～学習観尺度を用いた授業実践評価～をもとにアンケートを作成した。

（文責：東京学芸大学附属高等学校 栗原智美）

### 3. 生徒の持つワールドカフェ授業実践のイメージとその示唆

本授業実践における教師側のねらいは，生徒に意識変容を促すような実践を推進したいということだろう。今日の学校教育への要請として，単なる学習内容の理解に留まらず，具体的な行動に移せる，主体的に思考し応用する態度が持てるといった個人の意識にまで影響を与える方策が求められている（Hess and Azuma 1991, 河村2010）。こうした要請に応える為には，教師が伝え，生徒が聞くという一方通行の授業には限界があるだろう。その為，アクティブラーニングや総合的な学習の時間を活用した生徒の主体的な学びといった議題は注目され続けてきた。本実践はそうした議題に対して，より良い実践形態を提示するような試みと言える。

この点を踏まえるなら，本授業実践が本当に教師のねらいに沿う形で生徒に捉えられているかは確かめるべき課題と言える。もし，本授業実践が生徒の主体性に重点を置くものと生徒自身に受け止められておらず，教師の指示に従うようなものと捉えられているならば，教師のねらいは果たされたとは言えない。生徒の授業や学習への捉え方は，学習行動，方略に影響を与えるものとして分析対象とされてきたのである（Marton et al. 1993, Säljö 1979）。加えて，より良い実践を本実践だけに閉じたものとせず，一つのモデルケースとして広く発信する意味でも客観的分析は必要である。そこで，本実践を経験した生徒たちが本実践とはどのようなものだったと捉えているのか，そのイメージを把握することとした。こうした生徒に与えたイメージを把握することで，本実践がどのような意義があったかや，他の実践とどのような差異があるかを判断する手がかりが得られると考えられる。

本分析には，本実践の成果物として収集された生徒の感想文の内，「ワールドカフェ授業のイメージを5つのワードで示してください」という設問に対する生徒の回答を対象とした。分析方法として，1）形態素解析を行い回答の中に認められた単語の出現数を把握，2）単語の出現頻度と関係性を基にした共起ネットワーク図の作成を行った。なお，形態素解析に先立って，同一の意味を持つと考えられる単語は同一単語に置き換えた。これらの分析には統計解析ソフト R3.5.1及び KHCoder ver.3を使用した。

収集されたのは40名の感想文だったが，該当設問へ回答しているのは39名だった。この39名の回答を形態素解析したところ，100種223語が抽出された。表1に，2回以上出現した単語一覧と出現数を示した。授業中にも関わらず飲むことが許された「お茶」，「飲み物」が頻出していることが確認された。また，授業そのものが持つ雰囲気を表す語として「楽しい」や「自由」，「リラックス」が確認された。そして，授業形態に関する「話し合い」や「意見」，「アイデア」も頻出していたこと

表1 形態素解析によって抽出された単語と出現数

抽出語	出現数	抽出語	出現数
お茶	15	お菓子	2
楽しい	11	のんびり	2
自由	11	クッキー	2
飲み物	10	グループ	2
ない	8	グループワーク	2
話し合い	8	飲む	2
する	7	飲食	2
リラックス	7	会議	2
アイデア	6	気軽	2
意見	6	紅茶	2
否定	6	出す	2
水筒	5	出る	2
やすい	4	食べ物	2
楽	4	新しい	2
話す	4	図書館	2
カフェ	3	水	2
コーヒー	3	本	2
机	3	和気あいあい	2
付箋	3		

が確認された。こうした出現頻度と単語同士の結びつきを考慮した共起ネットワーク図が図1となる。図1より、頻出語と関連がある単語が確認された。例えば、「お茶」と「自由」が結び付き、更に「自由」は「意見」の関連が示された。こうした関連からは、生徒の中にはお茶を飲む授業形態の中に自由さをイメージした生徒がいることが示されたと推察される。また、「自由」は「意見」と結びつくことから、自由に意見が出てくるというイメージも有ったのだと解釈できる。同様に頻出する「楽しい」と「話し合い」が関連することから、本授業実践は楽しい話し合いができるものだったとある程度の生徒に捉えられているようである。加えて、「話し合い」と「否定」、「する」、「ない」が結び付いており、話し合いの中で生じた内容を否定しないよう配慮することもイメージされたのだと考えられる。

こうした分析結果と解釈に基づき、本実践が生徒に与えたイメージとその意味するところを更に考察してみよう。本授業実践が最も多くの生徒に与えたイメージは先に示した解釈の通りである。つまり、「飲食をしながら生徒同士で自由に意見を交え、意見や考え方は尊重すべきなのだ」というイメージが生徒に印象付いたと言える。注目すべきは、生徒同士が意見を交えること、そしてそれを否定せず尊重することがイメージされたことである。主体的な学びを促すことは教師のねらいところであり、生徒にもそれが伝わったと言えるだろう。お茶などの飲食物が自由やリラックスといった印象を与えることに役立ったのではないかと推察される。ワールドカフェ形式を取り入れたことでこれらのイメージを与えたことが確認できたため、教師が本授業実践でねらったことは生徒にもそのまま受け止められたのだと言える。一方で、本授業実践は「楽」だと表記した生徒がいることも確認された(表1)。図1より、「楽」と結び付いている単語は「紅茶」、「クッキー」、「水」といった飲食物が挙げられる。出現数は少ないのだが、本授業実践でカフェ形式を取り入れたことが「他の授業より楽だった」というイメージを抱かせた可能性はあるだろう。飲食を許されるワールドカフェ形式はリラックスした空間であると言えるが、捉えようによっては弛緩した雰囲気が印象づけられたのだと考えられる。教師のねらいをより良く伝える為には、このイメージの定着は避ける必要がある。本授業実践は、あくまで意見を交える学びの為の場なのだとして生徒に理解してもらい工夫が検討課題となるだろう。或いは、意見を活発に発言しようという意欲を高める工夫も効果的だと考えられる。次年度以降はこうした課題を踏まえてより良い実践とする示唆が得られたと言える。また、被験者数は少ないもののこうした客観的な議論を基に、ワールドカフェ形式の授業実践の有用性を議論していく為の材料も確かに提示できたと考えられる。(文責：東京大学 大塚 啓太)

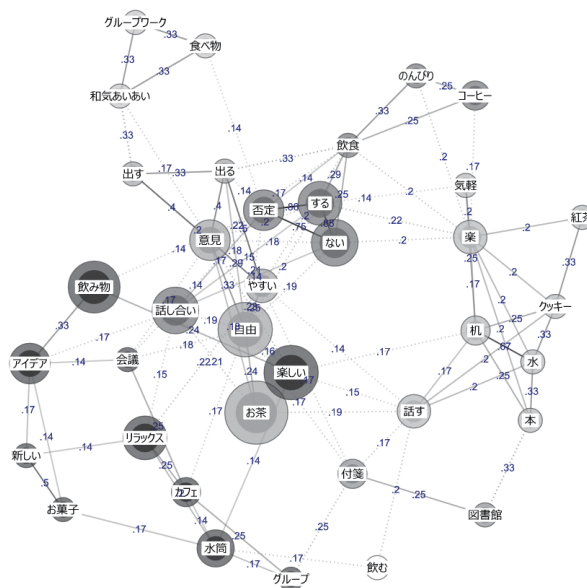


図1 生徒の回答から作成された共起ネットワーク

※単語を囲む円が大きい程その単語の出現数が多いこと、単語間を結ぶ線が濃い程その単語間の関連が強いことを表す

#### 4. 今後の課題と予定

「3年次」は3年間のまとめを実施する計画である。1・2年次の結果を踏まえて、2年次に高校で実施した授業において高校生成成の指導案を基に保育園で園児に向けての授業を実施する。アンケートと活動観察を行う。～防災関連授業の実践をふまえた活動的な授業形態のラーニング・デザイン～として、教員を目指す大学生の授業で大学生が自らワールドカフェ方式の学習やジグソー的な学習を体験することが出来る授業の展開と研究の可能性を目指している。本実践にて新たな方式を取り入れることの効果を確認できたことは今後の足掛かりにできるだろう。学びを促すファシリテーションとして今回の試みをベースとした内容の他、日本環境学会発行（2019年5月）の大学生に向けたテキスト内に掲載のダイヤモンドランキング、タイムライン、コンセプトマップ、他の15のアクティビティの中からワールドカフェ方式以外の方法を選定し、大学の授業としてアクティブな学びの可能性を探る。

また、附属学校においては、2年次の高校の災害、防災に関する家庭科の授業で実施した、ワールドカフェ方式の授業で高校生が作成した指導案を、3年次は各校種で実施したい。それら授業の準備として国立青少年教育振興機構の施設における災害、防災関連授業をプレ実施している（2019年12月24日付日本教育新聞ネットニュース高校生掲載～「災害時」を想定した野外炊事 学芸大附属高生らが挑戦～）。また、児童・生徒の側だけでなく、大学生の学習教材となり得る形を深め、精査していきたい。

中学、特別支援学校、高等学校での授業を実施したので、今後小学校、保育園、大学での実態に合わせた実施が研究により可能になれば、カリキュラムにおいて繋がる部分が見えてくる。限定された教科だけでない、多くの教科を関連付けた授業の展開が可能になる。

（文責：東京学芸大学附属高等学校 栗原智美）

#### 5. 学校図書館との連携

ワールド・カフェ形式の授業を図書館で行いたいとの提案が家庭科教員からあった。自由に議論をかわし、否定をしない方式は学校図書館にふさわしいと考え授業に望んだ。生徒はワールド・カフェという名前になじみが薄いようではあったが、通常の図書館授業のグループ討論を踏まえ、テーマを理解し活発な話し合いが行われた。否定をしない授業は生徒同士の肯定感、信頼感を生み、えてするとリーダーが中心になりがちなグループ学習に良い学習成果があると思われる。本校では文部科学省が推進するコミュニケーションの向上を図る授業を行うケースが往々にしてある。他の教科へのいい影響も考えられた授業展開となった。以下にワールド・カフェ関連の資料の提示を行う。

1. ワールド・カフェから始める地域コミュニティづくり 実践ガイド 香取 一昭著、大川 恒著 学芸出版社
2. ワールド・カフェをやろう 会話がつながり、世界がつながる 香取 一昭著、大川 恒著日本経済新聞出版社
3. ワールド・カフェ カフェの会話が未来を創る アニータ・ブラウン著、デイビッド・アイザックス著、ワールド・カフェ・コミュニティ著、香取 一昭訳、川口 大輔訳
4. ESD の地域創生力 持続可能な社会づくり・人づくり9つの実践 阿部 治編 合同出版

（文責：東京学芸大学附属高等学校 岡田和美）

#### 引用文献

- 日本環境教育学会編、(2019)：環境学習のラーニング・デザイン、キーステージ21  
Hess, R. D., & Azuma, H. (1991): Cultural support for schooling: Contrasts between Japan and the United States, *Educational researcher*, 20(9), 2-9.  
河村茂雄 (2010)：日本の学級集団と学級経営, 図書文化  
Marton, F., Dall'Alba, G., & Beaty, E. (1993): Conceptions of learning, *International journal of educational research*, 19, 277-277.  
Säljö, R., (1979): Learning in the learners' perspective: 1 Some common sense conceptions no.76, Göteborg, Sweden: University of Göteborg, Department of Education 8, 443-451